

福田歓一著「デモクラシーと国民国家」岩波現代文庫、岩波書店 2009年5月15日刊を読む

民主主義と国民国家

1. (1)日本の国家の根本的な特色は、現代における民主主義や国民国家の大きな変化において一体どういう意味をもつのでありましょうか。ここで私どもが考えなければならないこと、また考えるに値することとして、私の次のような問いを出してみたいと思います。
 - (2)すなわち、民主主義が国民総武装のゆえにもっていた緊張を、いまや武装、軍事力が何ものをも解決しないことがこれほど明らかな時代に、しかも、主権への執着がいよいよ強まるようなそういう世界のなかで、われわれは非武装でいくという決意が生み出す新しい緊張に置き換える、そのなかでわれわれの安全を平和的な手段によって刊補していくようなそういう手段の開発、そのために知恵を出すことに使うことはてぎないか、がそれであります。
 - (3)もし真剣にそういうことを考えるとすれば、われわれは国内において多様性をあまりもたないだけに、いよいよ外の世界がいかに多様であるかを知る必要がある。それはそれぞれの国がわれわれの経験でもって、あるいはその延長として理解できないほど複雑で多様な問題を抱えているということを理解することであり、同時に、世界の150の異なった国家、異なった政治社会が、相互のあいだでも実に多様であるということをしらなければ有効な手段の開発は、初めからできないからであります。
2. (1)しかも、こういう新しい生き方をわれわれが選ぶことは、けっして世界史的な意味をもたないことではありません。
 - (2)それは、いまや主権国家というものを乗り越えなければどうにもならないことがこれほど自明でありながら、自明なことの認識を行動に翻訳することのできない世界にあって、われわれがほんとうにしぼり出すような苦勞をして、もちろん簡単にできることではございませんけれども、この認識を前提として知恵を出す新しい行き方を作り出すことであり、それはわれわれり国、この総武装の民主主義的伝統と無縁にできてきたわれわれの国にとって、すべての人間が力を合わせるという意味での民主主義の大きな機会を提供することであります。
 - (3)しかもそれは今日、例えば人口や資源の問題や、南北問題のような深刻な問題を抱えた世界にあって、これらの問題に民主主義的な解決を求めていく希望を生み出すのに明らかに役立つ

と思われるからであります。

時間を多少すぎましたので、これで私の話を終わらせていただきます。

P168 ~ 169

[コメント]

では一体何ができたのかという膨大な税金を投入した割には世界から余りにも低い評価しか得られないのではないかとの批判が大きい。これからの日本の外交を考える大切なテーマと考える。

- 2010年4月21日 林明夫記 -